

# 日本篆刻家の研究

— 富岡鉄斎の篆刻と篆刻論 —

神 野 雄 二

## 一 はじめに

日本における印学の研究、印章や篆刻そして印人や印譜の、広い視野に立つた体系的な研究はまだ十分なされていないと言えない。本研究は、日本の印章や篆刻の歴史的、文化史的な解明を目的としており、総括的には日本の印学の体系化を目指している。これは書学・書道史の対象としてだけではなく、美学・美術史、歴史考古学、文化史等その裨益するところは甚だ大きいと思われる。

これまで、日本や中国における印章や篆刻家に興味を持ち、それへの史的考察や作品研究をテーマに据え論考を発表してきた。日本の篆刻家の研究、主として高芙蓉、小曽根乾堂、山田寒山、山田正平等の事跡の調査・研究と作品分析を問題としてきた<sup>(1)</sup>。また、わが国の印人伝における嚆矢と言える中井敬所の『日本印人伝』<sup>(2)</sup>をさまざまな文献・資料より拾遺し補訂することを課題としている。篆刻の専門家はもちろん、篆刻に関わる傍系の文人・芸術家の研究を併せて進めている。

本稿では、近代文人画の巨匠富岡鉄斎（天保七〜大正十三、一八三六〜一九二四）における篆刻面での業績と篆刻論を探る。過去に本テーマで執筆したが、新知見を加え、改めて考察するものである<sup>(3)</sup>。

## 二 富岡鉄斎の篆刻と篆刻論

### 1、金石との出会い

富岡鉄斎が金石趣味を持つことになったのは、文久元年（一八六一）の長崎への旅が、その端初とされている。鉄斎二十六歳の時で、彼は小曽根乾堂・木下逸雲・祖門鉄翁をはじめ、清国の文人と交際した。小曽根乾堂は篆刻に妙腕を振った人で、「国璽」を刻した。鉄斎は乾堂の許に身を寄せており、当然印や当時中国から舶載された明清の書画を目にしたであろう。本田成行（蔭軒）が『富岡鉄斎と南画』湯川弘文社、一九四三年一月）において「鉄斎翁が或は篆刻で身を立てようと考えたことも多分此の乾堂の感化であつたらしい」と述べる。また注目すべき事は、長崎遊学中、骨董店で見つけた「千人万人中一人半人知」の印を購入していることである。この事は、鉄斎がこれ以前に、相当印に興味を抱いていたことの証左となろう。

鉄斎の金石趣味の始まりは、ここに述べた長崎遊学の時であろうか。むしろこれ以前前大田垣蓮月との出会いに、それが求められないだろうか。蓮月は歌をよくした尼僧であり、繊細優美な書とともに、自詠を彫り込んだ蓮月焼で有名である。蓮月焼は、煎茶用の急須に和歌を釘彫りで刻みつけたものが多い。鉄斎は、蓮月の埴細工の仕事の手伝いをしており、この時、鉄斎は焼き物、そして文字を土に刻み込むという、金石の世界を目の当たりにしたと考えられる。鉄斎が蓮月と同居したのが十五歳頃とされている。後年鉄斎は、土を捏り、陶器を製し、陶印を手がけている。彼の金名趣味の端緒といえよう。

### 2、所蔵印

鉄斎の所蔵した印は、彼の晩年には一千顆に達していたという。若年期使用した印は大半失われており、晩年使用した印にも現存しないものがある。

二〇一〇年一〇月、『鉄斎研究』（第七三号）において「富岡鉄斎用印大成」が鉄斎美術館の編集により刊行された。鉄斎が没した時に手許に遺されていた三八五顆の印すべてを収載したものである。

鉄斎の所蔵印の特色は、数点挙げられる。まず彼自身刻した印を含むことである。次に日本・中国の古今の名家の印、そして古印、また同時代の篆刻家や文化人の印があり、それぞれ由来がある。これは鉄斎の鉄斎たる所以といえようが、来歴ある印の摹刻印があることである。豊臣秀吉の太閤印・岳飛の印・狩野探幽の印・関羽の印などである。

鉄斎の所蔵印は多様で、彼の古書の蒐集とも通じており、彼の多面性を示しているといえよう。

また、成語印を多く含んでいる。印の性格上、語句は二〜十字と短い、鉄斎の画業での姿勢や、人生哲学が端的に表現されたものが多い。主として次の数点に分類できそうである。

#### 一、読書と旅行

「読万卷書行万里路」(万卷の書を読み、万里の路を行く)「山水為侶」

(山水を侶と為す)「山水友」

#### 一、古典を現在に生かす

「従古」(古に従ふ)「今人古心」(師古品) (古品を師となす)

#### 一、金石の愛玩

「金石癖」

#### 一、画家としての姿勢

「以画說法」(画を以て法を説く)

#### 一、蘇東坡への敬慕

「東坡癖」「聚蘇書寮」「東坡同日生」

#### 一、天子への忠誠心

「天賜清福」(天、清福を賜う)「賜楓書樓」「天子知名」(天子、名を知る)

#### 一、人生哲学

「老而益壯」(老いて益ます壮なり)「老而益学」(老いて益ます学ぶ)

「曼陀羅堀」「都門狂生」

#### 一、思想

「学好三教志答四恩」(学は三教を好み、志は四恩に答う)

### 3、自刻印

鉄斎は生涯にどのくらいの篆刻を試みたのであろうか。富岡益太郎は、明治以前に使用した印は、その殆どが喪失したと考えられると述べており、明治以前の印の確認は、現在では難しい。喪失した印の中には、鉄斎の自刻印も含まれていたであろうことは、想像に難くない。

鉄斎自刻として『無量寿仏堂印譜』(全五冊・原鈴本、富岡益太郎編、寸紅堂、一九二六年一月)に五〇顆載せている。この中に、鉄斎が図柄を考え専門家に刻させた印、布字迄した印、印材のみ制作した印などを含んでいる。

『無量寿仏堂印譜』所載の自刻印以外で、鉄斎の刻印として確認された印を掲げておく。

一、「赤松連城」「風月道場」「天心」(『鉄斎研究』(二〇一七)(上記番号は

掲載号数、下記番号は図版番号、以後同様)<sup>(4)</sup>

一、「無事小神遷」「无念尔祖事修厥德」(『魁星閣印譜』全五冊・影印本、芸艸堂、一九八三年一〇月)

一、「笑矣乎」「鼓缶而歌」「雅邦」「勝園」「克己斎」「鉄斎」文人書譜一二、青木勝三著、淡交社、一九七九年一〇月)

一、「富岡百鍊字無倦之章」(掲載番号九)「鉄斎一八」「老而益壯二三」「鉄斎二四」(『鉄斎大成』続巻、鉄斎美術館、便利堂、一九八二年六月)<sup>(5)</sup>

一、「今人古心」(『墨』一〇号、芸術新聞社、一九七八年一月)

鉄斎自刻印の特徴について考えてみたい。まず第一点は、現存の篆刻を見ると、「鉄史」「受孔子戒」を刻した三十歳代から、「耄道人」「今人古心」を刻した八十歳代迄、生涯にわたって篆刻を試みている点である。第二点は、印材質、文字、印形などの多彩さであろう。鉄斎は印にできるものなら、どのような素材でも用い、自由な発想で刻した。一つの型式に墮することがなかった。第三点は、布字の自由さと、刀法の自在さである。決して器用といえない刻し方により、専門家のような巧緻な技法はないが、素朴な一刀刻りの雅味あふれるものである。布字も、画と文字を組み合わせたものが多く見られ、画家の眼で

もってなされていると思われる。第四点は、側款の刻の妙、鋭さである。柔らかい筆では表現しえない、刀の厳しさがある。

#### 4、愛蔵印

鉄斎は所蔵印の多くを書画作品に押している。どの印も、それ相応の愛着を持っていたであろうが、彼が特に愛玩した印がある。

一八九一年、二十六歳、長崎へ遊学した時、骨董店で見つけた「千人万人中一人半人知」、某人から贈られた「鍊道人」が第一に挙げられよう。次に、唐代の懷素が愛蔵していたという漢印「軍司馬印」、彼が尊敬した呉昌碩の刻した「東坡同日生」、そして辰馬家の家宝ともいえる「山碧水明」である。

ここでは「山碧水明」印を取り挙げて、彼の印への執心をみてみたい。

「山碧水明」印は、頼春水が布字をし、山陽が刻した父子合作になる、扶桑木の雅趣に富んだ名印である。頼氏と交際の深かった西宮の辰馬悦叟は、山陽の子三樹三郎に、しばしば醸造した美酒を贈っていた。そこで謝礼として、同印が悦叟に贈られた。

鉄斎は、悦叟や三樹三郎と交遊があつたばかりでなく、明治五年から七年末迄、山陽の旧居山紫水明処に寓居し、そこで一子謙蔵が生まれた。後年には、頼家が人手に渡っていた山紫水明処を買い戻すことになり、鉄斎が幹旋をした。このような因縁もあり、彼は同印を手に入れることを望んだが、悦叟は没し、この話を持ち出すことができなかった。後年悦叟の墓銘を撰書し終えた時、鉄斎は、この時をはずしては機会はないと考え、悦蔵にその旨を書き綴った手紙をおくった。手紙を受け取った辰馬家では困惑したが、鉄斎との長年にわたる交友を考えれば、無下に断るわけにもいかず、鉄斎には内緒で彼の存命中のみ貸すことになった。鉄斎は、印を手に入れた喜びで、山紫水明処図を描いた時は、この印を押し得意になっていた。『鉄斎研究』に取り上げられた山紫水明処図「二六・二〇」「三九・一二」「四七・一九」「四一・三〇」等には、この印を押し、印の由来が書き込まれている。

このように鉄斎の印への執心は、決して単なる骨董好きから発したものでなく、印の内容や来歴に関心を抱いたからである。

#### 5、偽印

鉄斎の作品は、偽作や贋作が多く、真作に対して数倍にのぼるとさえいわれている。「鉄斎の絵を見たら偽物と思え」とか「鉄斎に保証なし」と口伝えされるのも宜なるかなである。戦前に開かれた『鉄斎名作展』の出陳作品は、すべてが贋作で、用いられていた印もすべて偽印だったことがあるらしい。〔鉄斎〕正宗得三郎（平凡社、一九六一年十二月）

『富岡鉄斎』（『近代の美術』第四号、一九七一年五月）において、青木勝三は「偽印さまさま」で三〇顆の偽印を取り挙げ、真印との比較を試みている。中に精巧に作られた印があり、真偽に苦しむものがある。

鉄斎の書画を鑑定する時、印が一つのポイントとなることは確かである。しかし富岡益太郎が警告しているように「鉄斎の書画の真偽を見究めるのは非常にむずかしく、印章だけを根拠に真贋を論ずることは、かえって人を誤る恐れがある」（『魁星閣印譜』序）ということになる。

印は長年使用すれば、印面の消耗もあり、破損もある。また印泥のつけ具合、押し方により印影が全く違ってくるのである。

#### 6、印譜

鉄斎の印譜に、生前のものとして、正宗得三郎の『鉄斎』（平凡社、一九六一年十二月）によると、題字に「印何疊々」と書かれた、数百顆の印を押ししたものがあったらしい。また、『瓶史』（一九三四年新春特別号）によると、題簽に「文人多癖」と墨書された、蔵印三〇顆を押した、上下二冊本があったらしい。また、鉄斎は、よく画帖に印を押して、人に贈ることがあったが、その一冊が、東京国立博物館資料館の所蔵となっている。同譜は、跋文から一子謙蔵が押印し、鉄斎が刻者と印材を墨書したものであることがわかる。鉄斎蔵印三十六顆を折り帖に押している。桐箱題簽に「附之一咲」、また帙題簽に「鉄叟一癖」、折り帖題簽に「不值一錢」と墨書している。同譜に自刻印五顆を収めているが、『魁星閣印譜』に未収録の朱文印「桃華仙館」が押されている。鉄斎没後、代表的な印譜三種が編まれている。その第一は、大正十五年一月

九日、寸紅堂が三百部限定発行した『無量寿仏堂印譜』（一帙四冊）である。原鈐本の大冊である。第二は、昭和四十一年文華堂より刊行された『魁星閣印譜』（一帙二冊本）である。第三は、昭和五十八年、芸艸堂より刊行された『魁星閣印譜』（一帙四冊本）で、これは印刷本である。鉄斎用印三五八顆が収められており、鉄斎印譜の決定版ともいえるものである。

これら以外では、『鉄斎印譜』が、昭和三十五年五月五日、美術倶楽部出版部より刊行されている。また、昭和四十二年五月に、京都の東福寺山内東光院で、園田湖城を中心とする東山印社主催の「日本印人篆刻・遺墨・著書展観」が催された。その目録によると、同展に、小笹燕安居の蔵本『鉄斎自刻自用印譜』一卷が出陳されている。

その他、『鉄斎大成』等作品図録に、鉄斎の印を取り挙げている。中でも『富岡鉄斎』（『文人画粹編』第二〇巻 中央公論社 一九七四年一〇月）は、『魁星閣印譜』四冊本に未収録の印影を、原書画作品より五〇顆収録している。

## 7、用印法

鉄斎は「儂は意味のない絵は描かない。儂の絵を見るなら、まず賛を読んでくれなされ」と終始口にしていた。この事は鉄斎の画業を正しく理解する上で、極めて重要なポイントである。つまり鉄斎は単なる職業画家を目指したのではなく、画は深い教養の表出で、人格の表現である、と考えていたのである。

また鉄斎の書画を見る時、印を仔細に見る必要がある。鉄斎自身「無意味な印は捺さない」と語っており、押印に細心の注意をはらっていた事がわかる。画題や、描いた経緯により印を使いわけると、たとえば、蘇東坡に関するものであれば「東坡同日生」を、友人の長寿を願うものには「如南山之寿」といった具合である。印を贈られた時は、刻者に敬意を表し、その刻印を押している。

用印の方法は、むしろ古式にのっとったものが多い。ただ、意表を衝いた場所に押されたものや、賛の上や、画の大きさに不釣り合いとも思える大印を用いたり、創意を盛りこんでいる。ただそれらが実に画面にピッタリとおさまっており、効果的である。それはとくに画帖『睡余墨戲帖』・『静観樂声帖』・『東坡談』など、小品にいえる。鉄斎の書画作品から印を取り外したら、実に寂しい

ものとなる。そこに「押し魔」鉄斎の本領が見られるからである。

## 四

## 8、篆刻への評価

鉄斎は、明治二十八年の第四回内国勸業博覧会で、篆刻部の審査を務めている。当時から篆刻に対し、相当の評価を得ていたのであろう。

鉄斎の篆刻に対して、これまでどのような評価がなされてきたか、諸家の評語を抽出してみたい。その評価の高さが見て取れよう。

一、先生の篆刻は唯単に篆刻と言う所に止らず、あの方の芸術観、人生観といった鉄斎先生の一部が入って来る、そういったものだと思います。

（園田湖城「鉄斎先生のこと」『三彩』第三八号、美術出版社、一九五〇年一月）

一、印を沢山聚める趣味の人、所謂印癖家と云う人達があつて、何千鈕にも及ぶ、これは観て楽しむ側で、翁のは沢山の印を使用するので使用する側の印癖家と云いたい。（略）儒仏、神仙絵に依つて用印も工夫されて居り、赤い印が色彩家の鉄斎にとって重要な絵の一部分でもある。

（前掲、山田正平「鉄斎と篆刻」『三彩』第三八号）

一、鉄斎は若年、篆刻に目をつけてゐる。（略）鉄斎がどこから知ったか知らない。しかし篆刻の精神は金石に通ずる。これは大変重要なことだ。今までの日本文人画家の誰をもつてきても、鉄斎は違ふのである。鉄斎の画は立体的だが、他のものは平面的である。

（中川一政「富岡鉄斎に思う」『画聖富岡鉄斎と高島屋展図録』、高島屋、一九八〇年一月）

## 9、業績

富岡鉄斎の篆刻と篆刻論は、彼が終生述べていたように「その根本は学問にある」との言に尽きていよう。それは印や、印の由来は画賛や識語の題材とし

て取り上げられている。筆録にも印の所感が記されている。

富岡鉄斎の篆刻面での業績は、次の諸点に要約できそうである。

- 一、詩・書・画・篆刻の四絶による、東洋文人の理想世界を現出した。
- 一、日本で本格の金石派として、金石の気の横溢した作品を制作した。
- 一、多種多様な素材を用い、技巧を弄さない、一刀刻りによる、日本的な印を刻した。

一、「押し魔」と称していいほど、印をあらゆる機会に使用した。

一、中国・日本における古今の印を蒐集し、それを作品に用いた。

一、日本・中国の多くの印人と交流し、逸話を残した。

### 三 富岡鉄斎と印人との交友

富岡鉄斎は、篆刻を通して多くの印人達と交流した。書簡のやりとりや、人を介して交わった人もいるが、直接交際したのは、中国人では、羅振玉、日本人では、桑名鉄城・園田湖城<sup>⑥</sup>などである。鉄斎はこれらの印人との交流の中で、若年の頃より、興味を持ち続けていた、篆刻への思いを高揚させていったのであろう。それは、単なる趣味といった類のものではなく、「印奴」「印鬼」といった言葉さえ適するほどであった。篆刻が、彼の書画の実作面に、大きい影響を及ぼしていることはいうまでもない。先に掲げた、中川一政や山田正平の言葉からも理解できよう。事実鉄斎は、画賛に印の内容や由来を書き、印そのものを画題としたものさえある。

さて、鉄斎は確かに清介孤獨の人ではあったが、決して偏狭固陋といったタイプではなく、人との交わりを、むしろ大切にしていた。その事は富岡家に残されている膨大な筆録から窺い知れる。筆録は二六一件存しており、鶴田武良氏の編により『鉄斎筆録集成』（便利堂、一九九一年十一月）第一刊が刊行されている。筆録の内容は、鉄斎が過眼した書画の写しやその印象、京都の文人の逸話や動勢を書き留めたもの、和漢の図書からの抜書に感想を交えたもの、先人の本を書写したものなど、鉄斎研究の基礎資料として、最も貴重なものといえる。これまで筆録の一部は、小高根太郎先生が『美術研究』（便利堂）で翻刻されたものがあり、また『瓶史』（去風洞発行）においても、そのいくつか

翻刻された。小高根先生のお話しによると、筆録の中に、印影や印稿、篆書の校字、印人の事蹟などが墨書されており、更には往復書簡が貼付されているという。これらは今後『筆録集成』の続刊により、明らかにされていくだろう。本稿では紙幅の関係上、金石学者羅振玉、並に鉄斎の用印の多くを刻した桑名鉄城を取り挙げる。

#### 1、羅振玉

羅振玉（一八六六—一九四〇）は、上虞の人で字は叔言、また叔蘊・雪堂と号した。はじめ清朝に仕えていたが、民国の建国とともに、明治四十二年七月、日本に亡命し、大正八年六月迄京都に住んだ。そして満州国の建国に参画した。彼は考古学や金石学の学問に精通しており、甲骨文字解読の先駆者となった。中国上代文化の研究における功績はすこぶる大きい。

富岡益太郎は「羅振玉日本交遊抄」（『近代日本の書』墨臨時増刊、芸術新聞社、一九八四年一月）において、羅振玉と鉄斎との交友について述べている。

羅先生の京都移住を、革命の動乱を避けて亡命したというように表現した記事もあるが、無一物で乱を逃れてきたというようなことではなく、蒐集の古美術品も多数携行し、京都の邸宅には私も父に連れられて二・三度訪れたが、田圃のなかに四百坪の敷地があり決して貧弱なものではなく、従者もいて悠々と暮らしておられたようである。その古画や典籍を見せて貰うために謙蔵は鉄斎を羅先生の宅に同行し、以来二人は互いに訪問して親交を重ね、先生は鉄斎の為に印を鑄り、また貴重な中国の文物をたびたび贈与された。

これから羅振玉と鉄斎は、かなり頻繁に交流していたことがわかる。

小高根太郎著『富岡鉄斎の研究』の「クルート・グラーゼルと羅振玉」では、鉄斎と羅振玉との交友関係に言及している。筆録『鉄斎所見』を挙げて述べる。明治四十五年二月二十六日は、羅振玉の寓居を、洛東田中村に訪ねる。夏仲昭の墨竹巻を観るに、尤だ妙なり。詩経を見る。金粟山絳紙を贈らるに、我邦の鳥子に似たり。

三月三十一日、再訪す。数十幅の画山水を観る。皆似るも信すべからず。相拉きて詩仙堂に遊ぶ。与に酒飯を喫し徜徉す。既に 出門するに午後三時。

また、羅振玉の書簡を七、八通貼りこんでいる。この中に、羅振玉が鉄斎のために刻した、「富岡百鍊」と「鉄如意齋」に触れたものがある。書簡によると、前者は撥蠟法に仿つて、後者は切玉法に仿つて刻されたものであることがわかる。鉄斎は、筆録「銅鼓堂筆記」の中に、この二顆の印影を貼りこみ、その傍に「羅振玉の印は、雅味があり、彼の篆刻は余技ではあるが、甚だ妙味がある」と記している。鉄斎は晩年まで、たびたび両印を使用している。

次に、鉄斎と謙蔵と羅振玉の交誼を知る恰好の画がある。それは「插花鼎図」である。この画は、謙蔵が江蘇省丹徒県にある焦山に遊んだ折手に入れた、周代の古器「無患鼎」の拓本に、鉄斎が明代の陳道復の「八百一十有齡図」に学び、画を描き入れたものである。それに、謙蔵が羅振玉に器名を書いてくれるよう属し、振玉はそれに答え篆書で「無患鼎」と書いた。大正元年正月の事である。

また、羅振玉は鉄斎八十歳を祝して、殷虚亀甲三六枚と、篆書の詩聯を贈った。「徳を樹て言を立つ。光明正大。緑に綏んじ福を受く。康楽雍和」羅振玉が得意とした、甲骨文を用いた八言句である。識語に「殷商の文字を集め、敬しく鉄斎先生の八十を祝す。後学上虞の羅振玉篆す」とある。

大正八年六月二十日、京都円山の左阿弥楼で羅振玉の送別会が開かれた。鉄斎はすでに八十四歳と高齢であったが参加している。その時、羅振玉を囲んで、長尾雨山、犬養木堂、富岡鉄斎、内藤湖南が椅子に腰かけて撮影した、一葉の印象深い写真がある。富岡家には、送別会でかわした二人の筆談が残されている。鉄斎は「今回羅振玉と別れるのは、自分の父母と別れるのと同じくらい悲しいことである」と哀別の気持ちを記している。

中国と日本を代表する二人の文化人の交友は、日中人物交流史の中で特筆すべき出来事といえる。

## 2、桑名鉄城

桑名鉄城（一八六四―一九三八）は、富山の出身で、名は箕、字は星精、鉄

## 六

城・大雄山民と号した。居室を九華印室・天香閣と称している。はじめ北方心泉より篆法や金石学を学んだ。明治二十五年京都に移り、三十年中国へ渡った。中国では、趙之謙・徐三庚・呉昌碩などの刻法を学び帰国した。彼は円山大迂とともに、京都における大御所的な新派の大家となった。印譜に『天香閣印譜』（二帙八冊、一九一四年）、『九華室印存』（二帙四冊、一九〇四年）などがある。

鉄斎は桑名鉄城の印を好み、鉄城の刻した鉄斎用印は頗る多く、七五顆に及んでいる。鉄斎は、印が完成すると、その謝意として画を描き、印を押して贈った。

大正五年、鉄城は、鉄斎のために刻した印四六顆と、鉄斎の書画三〇点を併せて『無価宝』を出版した。これは二人の合作集ともいえるものである。

『無価宝』に収蔵された作品は、鉄斎作品中傑作といえるものが多い。中に一点書が含まれるが、これは鉄城が、明治三十年二月、清国に遊学する際、鉄斎より贈られたものである。「既に是れ壮夫子、却て篆刻を将て彫蟲を弄し、秦漢図書の妙を窮めんと欲す、一等遙に万里の風を凌がんとす」

鉄城の代表的な印譜『天香閣印譜』に、鉄斎は序文を寄せている。刊記に「明治歳開辛亥四月、鉄斎外史、時年七耋有六」とあり、明治四十四年、鉄斎七十六歳の時である。同譜には、副島種臣・日下部鳴鶴・内藤湖南・楊守敬などの序文や題字を収めており、鉄城の交友の広さが偲ばれるものとなっている。

また、小高根太郎先生著『富岡鉄斎の研究』（芸文書院）の「資料詩文集」に「鉄城印譜引」を載せている。「柴栗山、當て高芙蓉を称して、印聖と為す。蓋し我邦、秦漢の刀法を発揮する者、芙蓉の力なり。芙蓉没後將に百年、龍翥鳳翔の篆、得て復た觀るなし。桑名鉄城鉄筆を好み、大いに其の技を開かんと欲す。其の志喜ぶべきなり。余印聖の再び世に出ずるを期し、喜びて一言を題す」鉄斎は鉄城を、日本篆刻史上傑出した高芙蓉に与えられた「印聖」の称号をもって称え、彼に期待をよせている。

鉄城は「篆刻と人」（『瓶史』新春特別号、一九三四年）で鉄斎について述べている。いささか長いが引用しておく。

富岡さんについて思い出します事は、印が出来るごとに捺し初めだと言ふて画を呉れました。自身の画についてはそれが如何程の価になつて

るかは少しも知らない人でしたが、ひとに対しては別に色々の思ひやりがありました。それは篆刻の方は貧乏して居ると思っておるからです。

又鉄斎翁は私の家内がなくなりました時にも「死んでしまったものは香奠もいらんから」と云ふて家内の肖像に、観音の画を書いたから子供どもにまつらしくてと云ふて呉れました。又娘をなくしました時も又観音を書いて夫を肖像にしてくれと云ふて呉れました。その時は鉄斎翁の画が千金もして居る時ですから、さうした画料などは全く知らなんだ証拠であります。死んだものは何もいらんと云ひ乍ら風流人の家内は骨が折れるものだから御苦労だったと云ふ御志だったのだと思ひます。私は富岡さんには京都に出る時から世話をして貰ひました。

尚ほ鉄斎翁について面白いことは夏の山水の景を書かれたものを「これは非常によく出来てる。頼んだのは江州の人だけれどもこれは俗物で画がわからん。俗物のところよりここにおいてもらはふ」と云ふて持つて来られた事がありました。その画は鉄斎の傑作として今度東方書院からも出て居る日本画大成に出て居るものです。

更に私の感心しましたのは、私が京都に出て来ましたのは二十九の時でありました。本年は七十一歳になりますが、その時二年程病気をしまして窮したのであります。鉄斎翁はその時平野と云ふ宿家を持つて居る人に、ただで家をかしてくる人はないかと云ふて交渉して呉れました。親切な人でした。

鉄城が最後に述べた「親切な人でした」の一言は、鉄城が鉄斎から受けた恩情のすべてを物語っているのだろう。鉄斎のような篆刻の理解者を持ちえたことは、鉄城にとり幸せな事だったと言わねばなるまい。

#### 四 おわりに

富岡鉄斎の篆刻は、決して巧みといえないが、金石の気が横溢した鉄斎独自の美が宿されている。篆刻家の印は、伝統を踏まえ、確かに技術の優れたものが多い。しかし、ともすれば生気の乏しいものになりがちである。鉄斎の印を見ていると、彼の生命の鼓動が伝わってくる。篆刻論は片言隻語といえども含蓄に富むものである。鉄斎の篆刻は、日本篆刻史の中に、しかと書き記される

べきであろう。

最後に、本稿では紙幅の関係で述べられなかった事柄や、省略して論述した個所がある。いずれ別稿にて詳述したい。尚本稿を草するにあたり、次の諸先輩の学恩を賜わった。記して謝意を表する。

小高根太郎(図1)、遠藤玄遠、加藤慈雨楼、土屋雲廬、富岡清子、中田勇次郎、水田紀久、小木太法、清水義光、野中吟雪、鉄斎美術館、国立東京博物館資料館

#### 【注】

- (1) 『日本篆刻家の研究—山田寒山・正平を中心として—』(熊日出版、二〇一七年三月)
- (2) 中井敬所の『日本印人伝』は、わが国の印人伝における唯一の専著と言えるもので、好著である。敬所の『印人伝』に関して『日本印人研究—中井敬所の高美蓉研究—』(『大学書道研究』第一号、全国大学書道学会、二〇〇八年三月)で考究した。

- (3) ○「富岡鉄斎の篆刻」『富岡鉄斎と印人との交友』(インタビュー富岡鉄斎を語る、中田勇次郎 富岡鉄斎の芸術と学問(一九九四・三十八)・小高根太郎富岡鉄斎の芸術と鉄斎研究(一九九四・四・八)、『富岡鉄斎文獻目録』(『季刊書道ジャーナル』季刊三八号通巻第二〇一号、書道ジャーナル研究所、一九九四年八月)  
○「富岡鉄斎研究—園田湖城宛書簡—」(『修美』第二三巻通巻四八号、修美社、一九九四年十月)

- (4) 『鉄斎研究』(第一号〜第六五号、鉄斎研究所、便利堂、一九八九年十二月〜一九八九年四月)(第六六号〜第七〇号、鉄斎美術館、便利堂、一九八九年四月〜一九九一年四月)

- (5) 『鉄斎大成』(第一巻〜第四巻・続巻)富岡益太郎、小高根太郎、坂本光聰編(講談社、一九七六年九月〜一九八二年六月)

- (6) 筆者は一九九二年から数度に亘り、京都の園田家を訪問し、湖城息辰夫氏から、園田湖城の事を伺うとともに、その折湖城宛の鉄斎書簡四七通を示された(図2)。書簡は内容から大きく五種に分類できる。一は刻印の依頼状。二は刻印の御礼状。三は墨に関するもの。四はさまざまな物品を贈られた御礼状。五は湖城の質問に対する回答や、書画の揮毫に関する事などである。

湖城宛鉄斎書簡の価値は、鉄斎芸術が開花した最晩年にあたる十年間のものであることが、その第一に挙げられよう。行間をとらない彼独自の章法は、そして

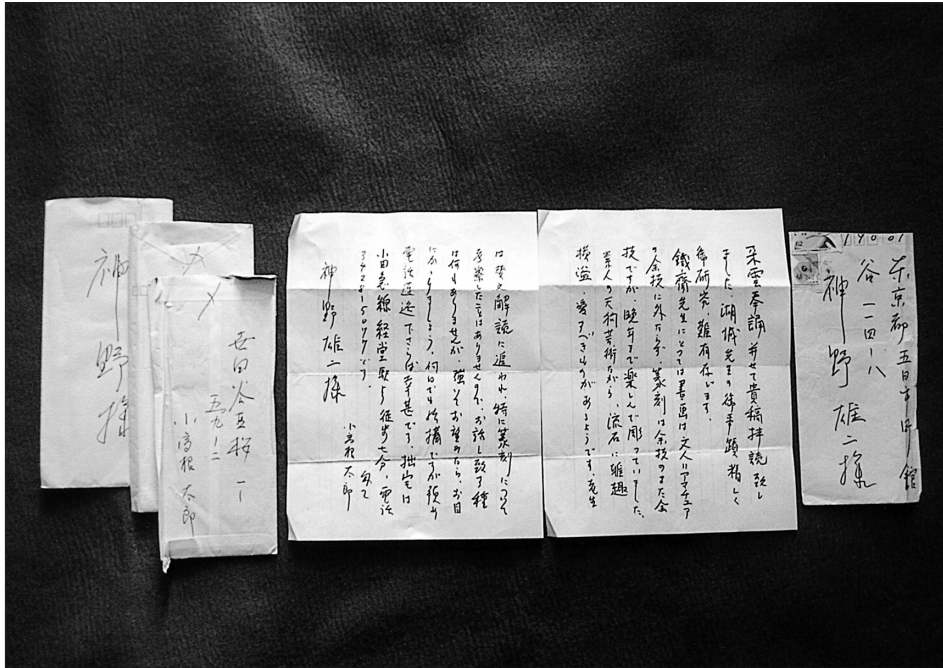


図1 小高根太郎先生筆者宛書簡

その鬼気迫る文字群は、彼の生命の表出と言えるものである。実に文雅の香りの高い、雅趣溢れるものとなっている。また、鉄斎は自ら下絵を描いて、版におこし、木版刷りにした巻紙や信箋を使用している。非常に美しいものである。その第二は、篆刻家園田湖城との交情の深さである。鉄斎は多くの文人と文雅の交わりを持ったが、中でも桑名鉄城や湖城など篆刻家との交遊は心暖まるものがある。

(7) 野中吟雪著『鐵齋の書』（新潟大学野中吟雪教授退任記念事業実行委員会、二〇〇七年三月）

（論文は本来、没故者の敬称は客観的記述に徹するため省略するのが慣例であるが、敢えて適宜付した。）



図2 園田湖城宛鉄斎書簡